

インフィニット・スト  
ラトス クレイジー  
ジーニアス

グ・ラン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

よお、俺の名前はジャック・アルフレッド。愛と平和とエロスの化身にして漢の中の漢を豪語しとるスーパー科学者兼一企業の社長や。この話は原作インフィニット・ストラトスにオリ主様が原作主人公の織斑一夏を徹底的にアンチして俺TUEEする上に原作ヒロイン達を1人残らずNTRする無双2次創作と言いたいがそんな味気の無い何番煎じか解らん無粋な2次創作は要らんやろ？

この話は原作主人公織斑一夏と俺ジャック・アルフレッド改めアラン・スミスの2人を主人公にした下ネタ有り、メタネタ有り、原作改変有りな2次創作や。さあーで、どんな話になるかその目に焼き付け!!

# 目次

プロローグ【ジャックからアランへ】

1

第1話【愛と平和とエロスのスーパーメ

カニツクマン】

4

第2話【誇り高き代表候補生】

16

第3話【白の初陣式】

29

第4話【零落白夜】前篇

50



# プロローグ【ジャックからアランへ】

2012年 8月下旬 アメリカ 某軍事基地にて…

それは一目惚れなんてチープな言葉では語り足らんくらい、身体に落雷が落ちたと  
言って良いほどの衝撃やった。当時10歳にも満たないマセガキやった俺は軍事基地  
に映るモニターに絶望してた何故なら、軍の機密コンピュータが何処ぞの誰かにハッ  
キングされた上に世界各国が引き出し格納庫に眠らせてた戦術ミサイルが誤作動起こして各  
国の都心部に投下されそうになつたからや。

誰もが終わりを迎えた悲壮感丸出しの顔をしてたその時、1人の近代的な甲冑を纏つ  
た女性がミサイルを1発も都心部に命中させる事なく対空圏内で無効化したその姿を  
見て俺はその女性に魅入られたと同時に女性が纏う甲冑にいつの間にか夢中になつて  
た。

後に「白騎士事件」と呼ばれる時間を境に世界が大きな変動していく事になるとは当  
時の俺は予想もしてなかった…

2022年 現在 アメリカ ワシントン内にある某高級ホテルにて

白騎士事件から約10年の年月が経ち、当時白騎士と呼ばれた甲冑は宇宙進出を目的

として篠ノ之束博士が開発したマルチパワードスーツ インフィニット・ストラトス I S である事が判明し今日に至るまで世界は大きく変動したあらゆる軍事兵器を上回る超兵器の誕生に誰もが手を伸ばし我が物にせんと動いたがある欠点があった。

それは、女性にしか I S は搭乗出来へん事が判明して女性優遇する女尊男卑社会が当たり前な風潮になり今では女は偉い、男は家畜つちゆう性別差別の時代に発展したが俺から言わせればしょうもない世の中や。それにそんな時代が長続きしとつたらいずれ不満が爆発して人類滅亡エンドになるんは目に見えとるわ…

おっと考え事はここまでにしとこか。俺はハンガーに掛けてある白い制服を手に取り、スーツケースに納めるとドアをノックする音が聞こえた。

「入ってええよ〜」

「失礼します。若様、プライベートジェットの準備が整いました」

ノックした赤髪の男の名前はヴェリル・ガモン。俺の幼馴染兼ボディガードを務める兄弟以上の大事な家族や、詳細は長なるからまた後日話させてもらうで

「そうかあ、ご苦労さんヴェリル。俺が不在の間お前が今からジャック・アルフレッドや。なんかあつたらいつでも連絡せえよ」

「承りました。若様も学園生活を存分に満喫なされて下さい」

「おう、俺がスポンサーとして運営しとる学園がキチンとしとるかキツチリ見てくると

同時に俺が心血注いで開発しとる男でも搭乗出来る世界初のISを完成させるインスピレーションを掴んでくるわ。それと今は若様なんて堅苦しい呼び方はええでヴェリル。昔みたいじゃックでかまへん」

「ああわかつたよジャック、気を付けて行ってこい兄弟！」

こうして俺ことジャック・アルフレッドは仮初の名前である「アラン・スミス」へと名前を変えて日本国内にある人工島に建てられたインフィニット・ストラトスを扱う搭乗者・技術者育成機関「公立高校IS学園」へと向かう事になるが世界各国の試作型第3世代機をお目に掛かれると分かるとうつつワクワクするわ。だがそれと同時にIS学園を中心に世界が大きな変動と陰謀の渦に巻き込まれていく事になるとはその時はまだ予想して無かつた：

第1話へ続く：

次回予告、第1話【愛と平和とエロスのスーパーメカニックマン】

## 第1話【愛と平和とエロスのスーパーメカニックマン】

2022年 4月7日 IS学園内教室 1年1組にて：

ううっ、正直マジで居づらい：皆さんこんにちは、って誰に挨拶してんだって野暮なツッコミはよしてくれよ。俺の名前は織斑一夏。俺の記念すべき高校生活はクラスメイトが全員女子だらけの状況から始まりました：

事の発端は俺が本来受験する高校藍越学園の入試試験へ向かっていた時だった。試験会場に向かっていた筈の俺は道に迷い、近くに居た受験官と思う女性に声を掛けて場所を聞いたら顔を見ずに案内したのか、俺の顔も見ずに雑に場所を教えられて進むと甲冑のように飾られたISが大広間に鎮座されていた。何度かニュースで見た事あったが実際に間近で見た事が無かった俺は興味本位にISに触った瞬間：

なんと鎮座していたISが突如、息をするように動き始めて俺の頭に膨大な知識の波が流れ出した。ISの稼働する音に駆けつけた試験官が俺を驚く様子で見た後、大勢の試験官やお偉いさん達が次々と現れて、俺は一日中別室に軟禁される事になり藍越学園への試験は結局間に合わず第二志望にしていた高校を受験しようとしていたら俺の姉にあたる千冬姉がこの学園【IS学園】の推薦状を持って入学しろと有無を言わさず入



学する事になり現在に至るが…

何て話しかけりや良いんだよ!? 女子30人以上いる中、男は俺1人だけって何の罰ゲームですか? 俺は唯一の顔見知りである幼馴染の筈に救いの目線を向けるも当の筈はピイツと俺の視線を避けると来た。畜生っ! この薄情者め!! 俺は今後の学園生活をどうしようかと頭を悩ませていたその時…

「織斑君、織斑一夏君。へ、返事をして下さい。今織斑君の順番ですのでクラスの皆に自己紹介をお願いします」

教壇の上に立つ女性が俺に声を掛けるのだった。彼女の名前は山田真耶。このクラスの副担任を務める先生だが、低身長に童顔と言った見た目で一見、成人した女性には見えないが胸元にあるπは大人サイズだと言っておく。俺は山田先生の低姿勢すぎる様子に気を取り直してクラスメイト達に挨拶することにする。なァーに、性別が違うだけで同じ人間同士きつと心は通じ合える筈だ。

「お、織斑一夏です…あつ、えーつとく…」

じーーーーー

何その続きを期待してる羨望の眼差しは! 無いからな、何も無いからな!?! 特に真後ろに居るダボつとした学生服を着た女子! 目をキラキラして俺を見るんじやありません!! 俺は何かやれよ的な空気に包まれる中、この空気をいち早く抜け出す為息を吸い目

に力を込めて一言言い放った。

「以上です!!」

ガタタンっ!!

クラスメイトの殆どが椅子から転げ落ちる結果になった。真後ろのクラスメイトはパチパチと小さな拍手をしていたが、やめて! 変に気を使うのは!?! 俺のメンタルライフはズタボロよ!?! すると俺の頭部に痛みが走る。

「あ痛っ!?!」

「もう少しマシな自己紹介が出来んのか馬鹿者」

「げっ、千冬姉!?!」

「実の姉に向かって、げっとは何だ馬鹿者」

俺の頭を叩いた人物の声が聞こえたので振り向くと俺の実の姉である千冬姉が黒いスーツを着て、教室に立っていたのだった。その驚きに声を上げた瞬間二度も頭を叩かれました。俺はもぐら叩きじゃないんだが…

「織斑先生、おはよう御座います」

「おはよう御座います山田先生。私が不在の間、ホームルームをお任せして申し訳ない」「いえ、これも副担任である私の役目ですからお気になさらず」

千冬姉は慣れた様子で答えると山田先生は顔を赤く染めていたが、その様子は憧れの

スターに声を掛けられて嬉しくしているファンみたいだった。千冬姉は  
教壇に上がると自己紹介を始める。

「私がこのクラスの担任になる織斑千冬だ。私の仕事は君達ひよっこ共を一人前の生徒に鍛える事だ。異論、反論は一切認めん。文句があるならいつでも来い相手になつてやるが、私は決して見捨てはしない。1年間よろしく頼む」

何この鬼教官、永和のご時世にこの自己紹介は色々不味いだろ、ネットやSNSで書き込まれんじゃ無いかと思つていたその時：

「「キヤーーーーーー!!!」」

クラスメイトの黄色い声が教室内に響き渡るのだった。

「キヤー、本物の千冬様よ！」

「あの千冬様に鍛えて頂けるなんて光栄です」

「私、千冬様にお会いする為に大分から来ました！」

等と俺の不安とは正反対の結果だった。それにしても千冬様ってどここの塚系スターだよ。一部のクラスメイトはいつ用意したのか自前の法被に団扇まで用意していた。そんな黄色い声に包まれた当の千冬姉は

「まったく、毎度毎度呆れるばかりだ。私が担任だとこんな大騒ぎする連中が集められるのか？」

と見慣れた光景なのか呆れた様子だった。それにしても千冬姉、教師をしてるって前々聞いてたけどまさかこの学園で教師をやってたなんて全然知らなかったな…俺はその場に立ち続けていると千冬姉から席に座るよう注意を受けた。

「あともう一人、この学園に入学する事になった生徒を紹介しておく。その生徒も織斑と同じく男だが…まあ私が紹介するより本人の口から聞く方が良いな。入れ」

えっ、俺以外にもこの学園に入学する男が居る…だと…よっしゃあ！これでポツチ飯は回避出来るぞ！俺はどんな奴が入って来るか期待に胸を膨らませていると教室の照明が突如、消え出した。突然の事にクラスメイトは騒めき出すが千冬姉の「静かにしろ」の一喝により鎮まると教室のドアが開き、その男は入り出す。但しムーンウォークをしながら…

ムーンウォークをしながら入ってきた男は軽快なステップで教壇に立つと音楽が流れ出し、いつ間にか用意していたスポットライトがその男を照らし出す。その男は190センチを越える長身に三つ編みに束ねた艶のある青い髪、ロングコートのような改造制服をステージ衣装のように着こなして伝説のポップスターを彷彿とさせるダンスで踊っていた。俺も何言ってるのか分からないが、本当に踊っていた。まるで自分がステージを彩るスターだと言わんばかりに…そして『Pow!』と決め台詞を言っただけのポップスターを丸々完コピしたダンスを終えると暗くなつた教室の照明が照らし出

すと踊り切った男が決めポーズで立っていた。

「教壇は貴様のステージじゃないぞこの大馬鹿者」

「ぐふえい!?!」

その直後、千冬姉が手にしていた出席簿で頭を叩かれていた。にしても何なんだ一体……と俺が困惑いるとその男は自己紹介を始め出した。

「グツモーニン1年1組のクラスメイト諸君！俺の名前はアラン・スミス。歳は18のアメリカからやって来た愛と平和とエロスの使者にして、ISの整備に右に出るものは1人もおらんスーパーメカニックマンや！そして、世界初男でも動かせるISを開発した漢になる漢や！皆よろしゅうな！」

その姿に俺は、いやクラスメイトの殆どが唾然とした様子だった。男でも動かせるISを開発した漢になる漢、待ってくれ頭の整理が追いつかない。クラスの全員が目の前の男、いやアラン・スミスの発言に目が点になっていたが……

「自己紹介が長すぎるわ大馬鹿者」

「あぎゃん！つて千冬先生、さつきから俺の頭叩き過ぎやんか。俺は叩いて治る白黒テレビとちゃうんやで!!」

「だつたらもう少しマシな自己紹介をしろ、大体、愛と平和とエロスとはなんだ。学生らしい事は何一つ言えんのかお前は」

「だから最後に言うたやんか。男でも動かせるI Sを開発するって、それに某少年漫画やと自分の夢言うたら実現するやんか。火影とか海賊王とか、妹を人間に戻すとか」

と千冬姉と顔見知りのような様子で答えていた。しかしこの様子を見ていたクラスメイト達（主に千冬姉のファンらしき連中）はと言うと

「何、あの男。千冬様に馴れ馴れしく話し掛けて」

「男の分際で生意気よ」

「男でも動かせるI Sを作るって馬鹿じゃないの？」

等と陰口をヒソヒソと話し始めるが陰口を叩かれた当の本人は：

「初めまして山田先生。こんな素敵な女性が副担任だなんて光栄です。もし良ければ今晚、僕と2人つきりで今後の性教育について一晩中語り合いませんか？勿論、実技も込みで」

とさっきのベタすぎる関西弁から打って変わってのイケボで山田先生を口説いていた。しかも下ネタ込みで、山田先生はそんなスミスの様子に顔を真っ赤にして注意するが男性慣れしていないのかアタフタした様子だったが：

「教師を口説き落とそうとするな大馬鹿者」

「いっつふう!?!」

千冬姉に再度頭を叩かれていた。

「ホームルームの時間をお前1人に懸ける程私も暇じゃないんだ。さっさと先に着け、お前の席は織斑の後ろだ」

「イテテ：はいはいわかりました千冬先生。空いとる席に着かせてもらいますわ」

「ってオイオイちよつと待て！俺の後ろが空いてたのは気になつてたが、まさかスミスの席だつたのかよ!?俺の後ろにトラブルメーカーとも言うべき存在アラン・スミスが席に着くと千冬姉は出席簿を教壇の上に置き、途中だつた出席確認を取り始めるのだつた。」

そしてホームルームの時間が終わり休憩時間に入った頃、教室の外からは早速IS学園に入学した男2人である俺とスミスを見ようと押し寄せていた。そんな中俺は背中を軽く叩かれて後ろを振り向くとホームルームで盛大に悪目立ちしたアラン・スミスがニコニコした笑みを浮かべていた。

「ほおーう、自分が織斑一夏か。はじめまして俺の名前は：：：ってさつき言うたな。アラン・スミスや。数少ない男同士仲良うしようや。Cinderella BOY」

「シ、シンデレラ・ボーイ？：：：って俺の事か!？」

「何や自分、ネットやSNSでどう呼ばれとるのか知らんかつたんか？ISを動かした奇跡の少年【Cinderella BOY】って世界中が注目しとるんやで。知らん方が可笑しいわ」

スミスは自分のスマホを取り出してSNSのサイトを開くとそこには俺の顔を一面にした記事が載っていた。しかも内容は「Cinderella BOY」織斑一夏  
IS学園に入学するとご丁寧に書かれていた。

「マジかよ。はあ、どうしてこうなったんだか…」

「オイオイ、華のティーンエイジャーが溜め息吐いてどないすんねん。こういう時こそどつしり構えて前向きに捉えるのが1番や。そうしとる内に自分の道が見えて来るもんや」

「あ、ああ。俺の事は普通に名前で呼んでくれて良いですよ。スミスさん」

「スミスさん？何やその他人行儀は？歳は確かに自分より上やが立場は一緒や、アランでええ。こつちこそよろしゅうな織斑ちゃん」

「ちゃん付けはよしてくれ。でもよろしくなアラン」

スミスことアランは気さくな様子で俺の背中を叩くと俺もそんなアランに習って応えるとききまで悩んでいたのが少し和らいだような気がした。すると、そんな様子を見ていた1人のクラスメイトが俺の席に近付くのだった。

「ちよつといいか？」

「え？…箒？」

「おつ、織斑ちゃんの知り合いか？それやったらお邪魔虫はちやつちやつと退散させて



貰うわ。ほな織斑ちゃんと思う存分話すんやで」

アランは皮肉めいた事を言うのと気を遣って席を立ち、廊下へと出て行く。その直後、アランを追い掛けようと廊下で様子を見ていた生徒達が一斉にアランを追い始めた。

「とりあえずここじゃ話しにくいだろ？廊下で話すか？」

「それなら、屋上が空いている。今ならまだ空いている筈だ」

「分かった。じゃ、屋上で話そうか」

俺は箒の提案を呑んで屋上へと移動する。その前に今、俺に話し掛けて来た女子、箒について話しておこう。篠ノ之箒、俺が昔通っていた剣術道場の師範の娘さんで俺の幼馴染でもある。初めての出会いはお互い良い印象は無かったが同じ道場で稽古をする内に話すようになっていった。それにしてもこうして箒に会うのも6年ぶりだな。箒はある事情で俺が小学4年の時に引越したんだが、久々に再会した時と変わらさず凛とした佇まいにキリツとした目付き、そしてリボンで纏めたポニーテール。さっきのホームルームでは助け船を出してスルーされたが、なんだ自分から話せるじゃないかと思っていたが屋上へと移動した途端、会話が起こらず立ったままだった。このままでは空気が不味いと思った俺はふと思ひ出した事を箒に言うのだった。

「そっさいえばさ」

「な、何だ？」

「去年の剣道大会、全国優勝おめでとう」

「知っていたのか？」

箒は俺の発言に頬を赤くして俺を見ていた。あれ？俺、なんか気まずい事言ったか？

「知ってるも何もニュースで載ってたし」

「だが、ほんの数分だけ流れただけだ」

「数分だけとはいえ、俺の知ってる人がニュースに載るのは嬉しいぞ」

「そ、そうか…フフツ、そうかそうか」

その言葉に箒は更に頬を赤くしているが何処となく不機嫌そうではない様子だった。不機嫌そうではなくて何よりだ。俺は6年振りに再会した幼馴染の気難しさを確認していたその時、2時間目が始まりを告げるチャイムが学園中に鳴り渡る。

「おっと、そろそろ2時間目が始まるな。遅れたら千冬姉にどやされる。急いで戻ろっぜ」

「わ、分かっている」

こうして俺と箒は久々の再会を数分で終えて、一目散に屋上から教室へと戻って行くのだった…

一夏と箒が屋上から教室へ戻って行く最中…そんな2人の様子を一部始終見ていた

人物がいた。その人物は屋上の屋根上から姿を現して屋上のタイルへと降り立つ。

「織斑ちゃんもすみに置けんなあ、あんな可愛いガールフレンドがおったなんて…あの娘が篠ノ之東博士の妹、篠ノ之箒ちゃんか。えーと…：IS適正はランクC、適正数値は平均やけど、15歳で篠ノ之流剣術免許皆伝か。大したもんや」

その人物はアランことジャック・アルフレッドであつた。ジャックは手にしたタブレット端末を取り出して箒の個人情報に記載された資料を読むと読み終えたのか端末をタップして資料を閉じるのだった。

「俺のクラスにISの超有名人2人の身内がこうも揃うとはな…：何の因果か、それとも唯の偶然か、面白くなってきおったわ。この学園生活が…：近いうちになんか起こりそうや」

ジャックは猛禽類のような鋭い目付きで笑みを浮かべるとロングコート状に改造した上着を羽織り、屋上を後にするのだった。その後教室に戻るのが遅くなった理由を千冬から問われた際、「トイレでダイ・ベーンと言う名の大悪魔を討伐しました」と言い訳した結果、4度目になる出席簿アタックが頭部に炸裂するのだった。

## 第2話【誇り高き代表候補生】

2時間目の授業が終わり3時間目前の休憩時間に入った中、俺は今ある人物に呼び出されて人気の無い教室に居て話をしていった。その相手は…

「全く、入学早々悪目立ちするような挨拶をして何を考えてるんだお前は？」

「ええやんか。何せこちとら人生初の学生生活を送るんやから多少の茶目っ気は許してえな千冬先生」

俺の頭を出席簿でモグラ叩きのように叩きまくった千冬先生や。因みに2時間目でもしこたま叩かれたわ。こっちは場の空気を和ませる為にアメリカンジョークで応えたのになあ…と吹けるのはここまでにしといて早速、千冬先生ご自慢の弟君の感想を言わんとな

「ホームルーム終わりにアンタご自慢の弟ちゃんと話したけど一先ずは及第点と言うた感じやな。ちよろつと話しただけやが人柄は問題無いと判断するで」

「そうか」

「あれ？弟君の事褒めたのに随分とまあ薄いリアクションやなあ？ホンマは嬉しいクセに。もしかしてあれですか？照れ「何か言ったか？」あだダダダ！アイアンクローは止

めてえ!?!俺の頭が潰れるウウ!!」

この人躊躇無くアイアンクローかまして来たで!?!待ってえーな、只のジョークやんか!俺は緩める事なくアイアンクローを喰らわす千冬先生に参って近くにあつた机を叩いて降参の意思を示すと千冬先生はそんな俺の様子に手の力を緩めた。あー、危うく頭から色々ぶししゃーする所やったで

「馬鹿な発言は程々にしておけ。仮にもIS学園のスポンサーにして、アメリカ最大の複合企業【インフイニティ・シーカー社】トップであるジャック・アルフレッド本人ならな」

「今、ジャック・アルフレッドは俺の兄弟分ヴェリルに任せて休業中や。それに学園内で俺がジャックやと知つとんのは千冬先生と理事長の十蔵はんだけや。それ以外の人間は全員知らん」

「無論、私も口外するつもりは無い。お前には色々と借りがあるからな」

IS学園に入学する前、いやそれ以前から俺は千冬先生と何度か会つた事があり顔も知つていた。その話をする<sup>と</sup>長なるからまた追々その関係性込みで話すが今回はスルーしてな。そしてもう一人の十蔵はんはIS学園の本当の理事長で普段は自分の奥さんが表向き<sup>の</sup>理事長として席に座つており十蔵はん自身は学園内の様子を自分の目で確かめる為、用務員として働いとる。

「天下の千冬先生にこうも言われると恐縮してまうわ。ほな、そろそろ自分の教室に戻らせて貰うわ。何せ次の授業、千冬先生自ら教鞭を振るう授業やからな」

「貴様：良いだろう私が教師になって丸くなつたと思つているようだが、その甘い考えを是正してやろう」

千冬先生は怒りのオーラを身に纏わせておつたが俺は一目散にその場から離れて颯爽と廊下を走り去る。その様子に千冬先生は「廊下を走るな大馬鹿者！」と叫んだ。次やつたら確実に出席簿でどつかれるのは目に見えとるから何か別の手段を考えるか、何せ千冬先生は廊下を走るなど言うとなつたしな：俺は教室内に着くと同時にチャイムが鳴り、クラスメイト達は自分の席に座るが織斑ちゃんのおつた1人の生徒がキツと睨み付けた上に捨て台詞を吐いて席に戻つて行つたが織斑ちゃん自分何したんや？

3時間目の授業は千冬先生直々のISに関する講義になっており、ISに関するより深い専門知識と自身の現役時代に経験した話を交えての講義は生徒の全員が一言一句聞き逃さない勢いでノートに書いてた。そこには副担任を務める山田先生も眼鏡を光らせて千冬先生の講義を聞いてた。時間もそろそろ授業終わりに近づいて来た中で千冬先生はふと何かを思い出したような口調で話し出す。

「そういえば再来週に行われるクラス対抗戦に出るクラス代表者を決めておかないと

な。クラス代表者とはその文字の意味通り、対抗戦だけで無く生徒会が開く会議にも出席するクラスの長だ。そしてクラス対抗戦は入学当初から各クラスの実力推移を測るものだ。因みに決まれば1年間変更は無い」

そういえば学園の教育プログラムとして俺が十歳はんに頼んで取り入れてもらったな。さて、誰に代表にするんや：今んとこ候補に上がりそうな人物は：と俺が考えておった時、クラスメイトから意外な声があった。

「はい、それなら織斑君が良いと思います！」

「私も織斑君を推薦します」

「私はスミス君を推薦します」

「私も同じくスミス君を推薦します」

と俺や織斑ちゃんを推薦する声が拳がつとる。おいおい自分等正気か？織斑ちゃんにはI Sをロクに稼働させた経験も知識も無いど素人やぞ!?織斑ちゃんをクラス代表にして他クラスへのアピールやろな。邪推な考えで決めんのは良くないで自分等。ほれ見ろ当の本人は突然の事に驚いとるやんか。俺は自分とこの会社で何台か動かした経験は有る。しかし、俺がクラス代表になったら俺の目的でもある男でも動かせるI Sの開発に費やす時間が減って完成が遅れるやないか！俺は辞退する事を告げようとしたその時：

「納得行きませんわ!!」

ダンッ!と机を強く叩く音が教室内に響いた。机を叩いた声の主はさつき織斑ちゃんを睨みつけて自分の席に戻った生徒やった。あの娘は確か…

「そのような選出認められません!大体、厳正に決められるべきクラス代表を男がなるだなんて恥を晒すにも程がありますわ。このセシリア・オルコットに1年間恥辱を味わえと言うのですか!?!」

そうそう誰かと思っいたらイギリスの代表候補生として入学試験を主席でクリアしたセシリア・オルコットちゃんやないか。ホームルームの時に首席で入学した代表候補生やと自己紹介したのを覚えとる。因みに代表候補生とは各国のIS搭乗者の中から自国で最も実力のある国家代表を選出する際、その候補として選ばれた存在や。因みに国家代表に選ばれるんは代表候補生が約100人おったとしてもたった1人しか選ばれへん狭き門やけどな。

「実力からしてわたくしがクラス代表に選ばれるのは必然。それを物珍しいからと言う理由で極東の猿やお調子者の道化師にされては困ります!わたくしはこのような島国まで来てIS技術の向上と修練に来ているのであって遊びに来ているではありませんわ!」

にしてもこの嬢ちゃんよっぽど自分に自信とプライドが高いんか自分が推薦される



べき存在やと言ひよるわ。その自信は大したもんや、せやけど俺がスポンサーとして建てたこの学園を好き勝手言われるんは多少腹立つわな。オルコットはまだ納得行かんのかヒートアップして喋り、挙げ句の果てには日本をデイスる発言まで出した。そんなオルコットの言葉にムツと来たのかある人物が意を唱えた。その人物は：

「イギリスだつて大した国自慢ないだろ。世界一不味い飯で何年覇者だよ」

意を唱えた人は織斑ちゃんやつた。考え無しで藪を突くような発言しおつて、ほら見ろ自分の国をデイスられたオルコットが顔を真つ赤にして織斑ちゃんに食つて掛かる。これ以上はもう見てられんわ、俺はオルコットが発する前に割つて入る事にした。

「はあくあ、アホくさ。やつてられんわ」

「アホくさですつて？ 貴方もわたくしをコケにしますの!？」

「コケもコケコッコもあるか。たかがクラスの頭を決めるだけで何をキャンキャン吠えとんねん。ここは躰のなつて無い駄犬ばかり詰めたペットホテルか？」

「何ですつて!？」

「お前に言いたい事はあるが、先ずは織斑ちゃん。さつきイギリスの飯は不味い言うたが自分食うた事あるんか？」

「食べた事は無い。さつきは頭に來てつい…」

「食うた事も無いのに人様の国の飯を勝手にデイスんなアホ！ ええか、国ごとによつて

味の文化はちやうんや。その事を理解して発言せんかい!!」

織斑ちゃんはまだ自分が言われるとは思ってなかつたのか面食らつた表情を浮かべたが自分の発言に反省して様子やから一先ずは良しとするか、さて次は…

「次は自分やオルコツト、周りから挙手されへんから勝手に待つたをかけんのはおかしいやろ? せやつたら自分から手挙げて示さんかい! 入学試験を主席で入つた代表候補生様々は自分で挙手する事も出来へんのか?」

「な! 貴方にそこまで言われる筋合いはありませんわ! さつきから何なんですか、わたしの母国に対して無礼を働く男にこのセシリア・オルコツトを躰のなつて無い駄犬扱いする男…ふざけないで!! 貴方にわたくしの何がわかると言うのですか!」

オルコツトは肩を震わせて上品な口調から荒々しい喋りで俺に告げると俺はある提案を交えた言葉を発する。

「んなもん知るか。先に喧嘩吹っかけて来たんは自分やろが、自分を正当化すんなや! 俺と織斑ちゃんに不満があるんやつたら四の五の言わずにどっちがクラス代表に相応しいかI Sを用いた試合で白黒ハッキリつけようやないか。勝つた方がクラス代表、負けた方は勝つた方の言う事を何でも聞くでどないや?」

「スミス君! 勝手にそのような決め方は」

「山田先生、ここはスミスに任せて見ましよう」

「織斑先生!?!ですが…」

山田先生は俺の提案に意義を唱えようとしたが千冬先生が山田先生を抑止する。すまんな千冬先生、こうでもせんとクラス全体に溜まった不安やオルコットのさつきまでの発言に頭に来てたクラスメイト達も納得行かんからな。俺のこの提案にオルコットは一瞬キョトンとしたったが直ぐ我に返るが織斑ちゃんは嘘だろ!?!と言わん様子やった。

「男の貴方からの提案をそのまま受け入れるのは癪ですが良いですわ!このセシリア・オルコットの實力を無知な貴方に叩きつけて差し上げますわ!!」

オルコットは自信満々な表情で俺に人差し指で指すが、話はまだ終わってへんで。

「オイオイ何勝手に盛り上がつとんねん。誰も俺がお前と戦<sup>やる</sup>うなんて一言も言うたらんやろ。戦うんは俺やない、お前と織斑ちゃんや」

「つておいちよつと待つてくれよ!俺はやらないぞ。そもそも俺はクラス代表になるつもりは無い」

「巫山戯るのも大概になさい。その織斑さんとは先程話しましたが、なんでもまぐれで実技試験の教官を倒した運が良だけのど素人。そんな素人がイギリス代表候補生として選ばれたエリートであるこのわたくしの相手にならないのは理解しているでしよっつ?」

「俺の余りにも意外過ぎた言葉にオルコツトは自分の事を舐めているのかと言わんばかりの様子で答えるがまあ慌てなさんな。お楽しみはここからや…」

「早合点すんなや。俺は織斑ちゃんのパポーターとしてお前とまともに戦えるよう鍛える役目言わば裏方や。織斑ちゃんに勝てたらこの俺に勝つたと捉えてええ。2人相手するより1人で2人分倒せると考えたなら一石二鳥やろ？」

「貴方正気ですの？今からでも遅く無いですわ、先程の発言を撤回されたらいかがかしら？」

「オイオイ俺をあんな舐めんなよ。男に二言は無いわ、それにな人間生きるならド派手に生きる方がオモロいやろ？織斑ちゃん、自分もこの学園におるからには避けては通れん道や！ウジウジ悩んどつてもしやーない、ドシつと構えて壁を破るんや。つてな感じでクラス代表を決めよと考えてますわ千冬先生。異論はありますか？」

「良いだろう。それでは勝負は来週の月曜、放課後第三アリーナで執り行う。織斑・オルコツト両名はそれぞれ準備を行うように」

千冬先生が話を纏め終えるとタイミンク良く授業終了のチャイムが鳴り響く。こうしてクラス代表を決めるクラス代表決定戦が来週に執り行われる事になった。1週間で織斑ちゃんを一端の操縦者にする時間が無いが、あとは本人のやる気とポテンシャルやな…とりあえず腹減つたし昼飯食べてから考えるか。

昼休憩に入ると食堂では誰が話を垂れ流したのか、俺と織斑ちゃん、オルコットとのやり取りがあつという間に拡散しており話が広まっていた。そんな俺を品定めするかのように食堂内では下級生から上級生の生徒達が俺に視線を向ける。すると学生服をツナギのように改造した上級生らしき生徒が俺の席に近づくと俺の真正面に近づき話し掛ける。

「お前さんかい？代表候補生のお嬢ちゃんに喧嘩売つたつてのは」

「売つたも何も俺は売られた喧嘩を買い取つて高値で売つただけや。で、アンタ誰や？俺とデートしたいんやつたらお断りやで。俺の恋愛対象は18歳以上からや」

「アハハハハ、面白いねアンタ。1年坊にしては肝が据わつてるじゃないか。自己紹介がまだだったね。アタシはミランダ・カーマイン、整備科のトップに立つてる者だよ」「へえー、アンタがああのミランダ・カーマインか。オーストラリア代表候補生の中でも国家代表を間違いないと約束されとつたがある事件を境に代表候補生を辞任された後、在学中に得た整備技術が画期的でISを取り扱う様々なメーカーからオフアアが来まくつてると聞いた事があつたがそんな有名な名人が俺に何の用や？」

「用も何もアンタ男でも動かせるISを作るつて自己紹介で言つたそうじゃないか。そんな大ホラを吹くような奴がどんなツラをしてるか見て見たくなつてね。顔を拝みに来たつてところさ……つて怒らないんだね、軽く挑発して見たんだが」

「俺の人柄を観察する気満々な挑発に乗る程、安ないんでね。それで俺を試しとったよ  
うやけどカーマイン・パイセンのお眼鏡に適いましたかな？」

「一先ずはね、アンタがCinderella<sup>織班</sup> BOY<sup>夏</sup>を本物にする魔法使いかどうか  
は来週のクラス代表戦でじっくり見させて貰うよ、精々頑張んなアラン・スミス」

一先ずは、か：まさか学園内の有名人であるミランダから接触してくるとはな。ミラ  
ンダの整備技術は確かに俺も喉から手が出る程ウチにスカウトしたい位や、さてさて織  
斑ちゃんの所言つてクラス代表戦までに何をするか話とかんとな：俺は食べ終えた食  
器を食器置き場に置いて教室へと戻る。

時間もあつという間に過ぎ去つて放課後：俺は今、人気の無い教室で織斑ちゃんと話  
をしていた。

「ええか織斑ちゃん、今のお前ではセシリア・オルコットに勝つ確率は1%以下や。せや  
けど安心せえこのアラン・スミスが織斑ちゃんを1週間で代表候補生とともに戦える  
程にビシバシ鍛えるで！この1週間、俺の事はアランPと呼ぶように」

「すまん、何言ってるのか全然分かんない。それとどうして俺なんだアラン？」

「アランPや」

「いやアラン「アランP」、だからなアラン：「ア・ラ・ン・Pィ〜」……はあ、アランP」

「どないした織斑ちゃん？」

「俺はまともにISを動かした事もない、かと言って知識も無い、無い無いだらけの一般人だ。正直、お前の期待には応えられそうに無いんだ」

織斑ちゃんは自分の現状を打ち明けて俺に話す。まあ、いきなり自分には無縁の物やと思つてたISがまさか動かす事になるとは思いもせえへんかつたやろな。その不安を抱くんは確かに誰でもそうなるわな。俺が織斑ちゃんに応えられるんは俺がこの言葉しか無いな。

「やらずに後悔するより、やつて後悔しろ。自分の可能性を自分で押し潰すな、自分の人生を常に派手に彩れ」

「え？」

「今の言葉は俺がガキの頃、親父からよういわれとつた言葉や。少しは不安が取れたか？俺はな織斑ちゃん、何も自分が千冬先生の弟やからオルコットと対戦させようとするわけやない。織斑ちゃんが前に進めるキツカケを作つただけや。それとなIS学園は学園在学中に就職に役立つ資格を取る事も可能やで。しかも斡旋される企業は皆、経団連に加入してる一流企業ばかりや。どや悪くは無いやろ？」

「確かに凄いな、就職面で優れてるのは…それにウジウジしてたつて千冬姉を心配させるだけだしな。俺やるよ。オルコットとの試合、だから俺にISの操作を教えてくださいア

ランー！」

「アランPやと言いたい所やが、ええで織斑ちゃん。この俺がおるからには大船に乗ったつもり、いや黄金の不沈艦【ゴール〇シップ】に乗ったつもりでおれ！その代わりこつちも手を抜かずにビシバシ教えたる!!」

「ああ、よろしくお願ひします！」

「よっしゃー！織斑ちゃん早速、今日の課題や！今から服脱いで動きやすい格好になるんや」

「……………はっ！」

「こうして俺と織斑ちゃんのクラス代表決定戦に備えての訓練が始まるのであった…



### 第3話【白の初陣式】

クラス代表決定戦まであと5日…

アランが教室で動きやすい格好になれと言われた俺はアランの言葉に訳が分からずにいたが説明を聞いた後どうやら俺の身体の動きや筋肉の発達・骨格などを見て俺のトレーニング内容を考えるとの事だったらしい。

その結果、俺の基礎体力向上を図るトレーニングとISに関する基礎知識の復習、想像力を養う為のイメージトレーニングを中心としたトレーニングを行う方針になったのは良いが…超絶ハード過ぎるトレーニングに俺のメンタルはやられそうです。しかも疲弊し切った所に追い討ちを掛けるように授業で習ったISの専門知識を予習しながら体感を鍛えるトレーニングを寮室で行なっている。アランが言うには『自分は頭でっかちで覚えるよりか、身体で染み込ませた方が覚えやすいタイプや』と俺の性格を見抜いた言動にはびっくりした。そして今、俺はアランに呼び出されて学園内にある道場にやって来た。

なんでも俺のトレーニングをサポートする助っ人と呼んだ方との事らしいが果たして誰なんだろうか…と思いつつ俺は指定された道場に入ると呼び寄せたアランは両腕

を前に組んで待ち構えていた。しかも道場の神棚に設置された額縁には達筆で書いた【スミス道場】と書かれた文字が飾られていた。

「押忍！メス、差あーす!! ようこそ、スミス道場へ！儂がスミス道場師範のアラン・スミスである!!」

「……すまない、色々突っ込みたいが頭が追いつかない」

「なーんや織斑ちゃん！ノリ悪いなあ、これは俺がリスペクトする某男塾塾長と冬〇の虎への敬意を込めたジャパニーズ道場スタイルやないか。そこは自分、なんで江〇島塾長とタイガー道場が混じつとんねんとツツコミを入れるんが世の常やろ？」

「そんな常は知らねえよ、くだらない事で呼んだのならもう帰るぞ」

「待ちいな、これは肩の力を抜く只のジョークやんか。本題はこつからや」

アランはさっきまでの巫山戯た姿を止めて真剣な表情を浮かべて俺に告げる。

「織斑ちゃんのトレーニングを俺も1から10まで徹底的に見てやりたいのは山々やけどな、俺自身も自分の為すべき目標もあつて関われる時間はそないに無いねん。せやから俺の代理として優秀な助っ人を用意したから今後はそいつとトレーニングを行うんや。メニュー内容は残りの日数分全てを紙に書いてもう渡しとる」

「それは分かったけど、アランが呼んだ助っ人は一体誰なんだ？」

「そう慌てなさんな、今その助っ人を呼んであんな。早速呼ぶとしよか、Camon<sup>キャモン</sup>！」

スミス道場門下生第一号!!」

「だ、誰がいつお前の門下生になったんだ。出鱈目を言うなスミス!!」

アランはそう言うのと右手でフィンガースナップをすると道場の戸が開き助っ人と思われる人物が姿を現してアランに異議を唱えていた。しかもその助っ人は聞き覚えのある声だった。

「助っ人って、まさか…」

「はい、その通り!織斑ちゃんを支える助っ人はこの俺スミス道場の記念すべき門下生第一号のモツピーこと篠ノ之 箒ちゃんです!!」

アランははっちゃけた口調で答えると紹介された箒は顔を赤くして俺からの視線を晒すように明後日の方向を見ていた。しかも箒が身に纏っていた衣服は学園指定の体操着に平仮名でほうきと書かれたゼッケンを付けて頭には門下生1号と書かれた鉢巻を巻いていた上に何世代前に絶滅したと言われたブルマと呼ばれた体操着を履いていた。

「この残りの5日間を我がスミス道場の映えある門下生1号であるモツピーと共に過ごすよう…」

「だからモツピー呼びは止めろと言ってるだろうが!」

「おぼおうえ!」

その直後、箒の右ストレートがアランの顔にクリーンヒットし、道場の端まで吹き飛ばされる。箒は息を荒げてアランに対して敵意ある視線を向けていたがこの2人一体何があつたんだ？

「オホン、話はそこの馬鹿から聞いている。私としてもお前があの高飛車な女に屈服する姿を見るのは同じ道場の門下生として耐え難いからな。仕方なく、仕方なくだがお前に手を貸す事にしよう」

「そうか、ありがとな箒。顔見知りのお前が手を貸してくれて非常に助かるよ」

「なっ…男が簡単に感謝の言葉を述べるな馬鹿者！」

「と言いつつもホンマは嬉しいくせに照れちゃって、モツピーのお・ウ・ブ・さ・ん…ぼうお!」

箒は俺の言葉に顔を赤くして俺にそう答えるといつの間にか起き上がったアランは何事もなかったように箒の背後に立っていたがその直後アランは箒のアップパーカットを顎から喰らい道場の天井に頭をぶつけていた。俺の幼馴染みが常人離れしているのは気のせいだと思いたい…それにしても箒が急に助っ人を買って出る事が気になった俺は箒に聞いてみた。

「その事だが、昨日の放課後にスマスから声を掛けられたのが事の始まりだ…」

箒はアランの助っ人になった経緯を説明し始める。

前日 放課後 1年生学生寮1025室前

箒は自身が入部する予定の剣道部に必要な道着と竹刀を取りに自室に戻っていた。昨夜、同室になった相手が自分が慕っている幼馴染みである一夏であった事に驚いたが自身の裸を見られた恥ずかしさが勝り、つい自分の悪癖が走り想い人を竹刀で叩いてしまった事を気にしていた。自分の素直になれない性格が災いしてこれまで良好な人間関係を築けて来なかった事も理解していたが言葉よりも身体が反応してしまう。そんな自分に嫌気が差してより一層剣道にのめり込むようになり、遂に篠ノ之流剣術免許皆伝までの実力を手にしたが箒の心は決して晴れる事は無かった。

箒は寮部屋内にある洗面台に映る鏡を見つめていたが、左腕に付けた腕時計を確認して見学の時間が迫っている事に気付いて道着と竹刀を手に携えて部屋から出た時一夏と同じ男でこの学園に入学したアランと鉢合わせるのだった。

「おお、丁度ええ所で会えたわ。篠ノ之ちゃん、ちよいと自分に用があんねんけど少しだけかまへんか？」

「私はこれから入部する部活の見学に行くので話は後にしてもらえますか？」

「ええて俺に敬語は。俺は自分と同じ学年や、変に敬語使われるのはむず痒くてな。気軽にアランと呼んでくれてかまへん」

「では遠慮無く言わせて貰うがお前とそんなに仲は良くない筈だ。それとあまり私を名  
字で呼ぶな、私は名字で呼ばれるのは好きじゃないんだ」

「それはあれか？自分が篠ノ之東の妹やからか？」

「!?」

アランの放った言葉に筈は一瞬動揺するが、顔に出すまいと表情を抑えてその場を立  
ち去ろうとするが…

「ISを創造した天才の中の天才、篠ノ之東と比べられるのは癪に触る所か。それは済  
まんかったな。せやけど…姉の名前から目逸らして逃げてるようじゃお前もその程度  
や」

「何だと…」

アランの挑発とも言える言葉に筈は足を止めるのだった。

「だってそやろ？自分の姉ちゃんの世界をひっくり返すような大発明をして評価を得れ  
てる中、自分は何も起こさんと黙々と竹刀をブンブン振り回して目標も何も持たんと同  
じ日常を繰り返してるんやろ？そないな奴には何やっても変わらん、ましてや離れ離れ  
になった両親に再会するのも夢のまた夢物語や。自分から行動に移らん奴にチャンス  
は…」

「何も知らない奴が、私を軽々しく語るなあ!!」

アランが言葉を言い終える前に箒が竹刀を手に取り、アランの頭に叩き込もうとしたが：アランは余裕の笑みを浮かべて箒が放った渾身の一撃を真剣白刃取りの構えで受け止めていた。

「ふう〜危ない、危ない、これ俺やなかったら大怪我どころの騒ぎぢやうで。全く人の話は最後まで聞かんかい」

箒は内心驚いていた。自分に非があつたとはいへ、自身の渾身とも言える一撃を涼しい表情を浮かべて何事もなかったかのように受け止めた人物に：箒はすぐ様竹刀を納めて謝罪の言葉をアランに告げるが当のアランは『煽った俺にも責任はあるから気に入んなや』と応えて不問にしたのだ。

「チャンスは訪れへんがもしそんな自分をほんの少一だけでも変えられるチャンスがあつたらそれにしがみ付くか？強制はせんが、一度逃したチャンスは2度と訪れることは無いで」

「私は…変われるなら変わりたい、私自身一番理解しているんだ。このままで何も起きない事くらいは…：ならどうしたら良いんだ？私はどうやれば変われるんだ？」

「その答えは俺にも分からん。何せ俺は篠ノ之箒やない、アラン・スミスや。自分の変え方は自分自身で見つけるしか無い、せやけどきつかけを作る手助けくらいは出来るで。その方法を知りたかつたら今から俺と勝負して勝てたら教えたるわ」

「勝負だと?」

アランの提案に箒はアランの真意を理解出来ずにいたがアランはお構い無しに話を続ける。

「せや、その勝負についてはここじや狭過ぎて出来へんから剣道部が部活動に精を出しとる道場で話そうやないか。それに元々俺も道場へ向かう予定やったしな」

「ちよつと待て、剣道部は私が今から見学に向かう予定の部だ。部活動中にお前の都合で止めさせる訳にもいかないだろう」

「ああ、それなら安心せえ。部長には事の詳細をもう伝えとるから使つてくれてかまへんとの許可も貰つてるから。そうと決まれば早よ行こか」

アランはあつさりした様子で箒の疑問に答えると学園内にある道場へ脚を進めるのだった。飄々した様子で喋るアランに箒は戸惑うがすぐ様後を追いかけて行き道場に着くと否や道着と防具を着けておいでやとアランからの一声を聞いて更衣室に入り、剣道着に着替えて防具も付けて道場に入ると防具も何も身に付けず制服の上着だけを脱いだアランが待ち構えていた。

「ほな早速ルールを説明するで、今から5分間の間に俺から1本取れば篠ノ之ちゃんの新技も勝ちや。勝つたら変わる方法を教えたるわ。ああそれと突き技も有効や。本来なら突き技は禁止手やが俺からしたらハンデにもならんからな。そして時間切れ、時間内に1



本も取れんかったら俺の勝ちや。負けたら俺からのお願いを聞いて貰うで」

「なつ、ちよつと待て！何故私がお前の頼みを聞かねばならんのだ?！」

「何で負ける前提で話すんや、俺から勝ちをもぎ取ったらええだけの話やんか。それともあれかな?篠ノ之流剣術免許皆伝の実力者でもある篠ノ之箒さんは俺に負けんのが怖いんかなあ?それやったら、悪い事は言わん。回れ右してとつと自分の部屋に帰って織斑ちゃんが使つとるベッドの残り香を嗅いでハッスルしとくんやな?」

その時、アランの煽りに箒の何かがブチつと切れる音がした。

「良いだろう…その減らず口永久に叩かないようにしてやる!!」

「ようやくやる気満々になってくれたか、ほな早速始めよか」

― 防具を着込んで顔色は分からないが箒は顔を真っ赤にした上に怒髪天を突く勢いで竹刀を握り締めていた。当のアランは懐から白金色の懐中時計を取り出して時間を測り出すのだった。箒は初手から竹刀を上段に構えて渾身の面を放つがアランはそよ風を流すかのような表情を浮かべて避ける。

「ええ一撃やけど、頭に血が登りすぎやで」

「ふんっ!」

かわされた竹刀を右側に薙ぎ払うように胴を狙うもアランは背中を曲げて竹刀を避けると身体をそのままバク転して体勢を戻すのだった。

「さあ、遠慮せんとどんどんおいでや。俺はただひたすら避けるだけや、残り4分50秒の間に決めれるかなあ〜?」

「くっ、舐めるなああ!!」

箒はその後、アランから一本も取る事無く時間切れで負けたのだった。休む事無く責め続けて息を荒げる箒に対してアランは何事も無く涼しい表情を浮かべた様子でいた。そんなアランの姿を見て箒は悔しい表情を浮かべていたその時:

「お疲れさん、4月とはいえまだ少し冷え込むからな。これ使って汗拭き、それと飲みも人も用意していたからそれ飲んで落ち着かせるんや」

いつ用意していたのか分からないがアランは箒に汗拭きタオルとスポーツ飲料を渡すと防具を外して汗を拭い去ると喉が渴いていたのかペットボトルに入ったスポーツ飲料に手を伸ばして水分を摂るのだった。

「ほな、約束通り勝負は俺の勝ちって事でかまへんな?」

「好きにしろ…」

「じゃあお言葉に甘えて、今から自分は織斑ちゃんをサポートになってもらおか?そして今から自分のあだ名はモッピーや!」

「おい、誰がモッピーだ!?!何だその色々失礼なあだ名は…私を馬鹿にしているのか?」

「馬鹿になんかしとらんわ。だって自分篠ノ之って呼ばれるの嫌なんやろ?せやったら

皆から愛着が着きやすいあだ名で呼んだ方がまだマシやる？それにこのモツピーってあだ名は今後、色んな人から呼ばれる事間違いなしや！」

「ええい、モツピーは止めろ！せめて名前で呼べ！」

「呼ばれたかつたら俺に勝負挑んで俺から一本取ったからにせえや。そしたら名前で呼んだるわ。それまで俺はモツピーと呼び続けるからな」

「それと何故私が一夏のサポーターをせねばならんのだ！元はと言えばお前が一夏を巻き込んでオルコツトに決闘を挑んだのが原因だろう!!」

箒はアランの決めた内容に抗議するがアランは箒の核心を突く言葉を言い放つのだった。

「だって自分織斑ちゃんにほの字なんやる？」

「ぶふっ!？」

アランの言葉に箒は口にしていたスポーツ飲料を吐き出しそうになった。

「だ、誰があんな優柔不断な軟弱者を好きでいるかあ!!それに私とあいつは同じ道場の門下生だけであつてだな…」

「んなベツタバタな照れ隠しせんでもバレバレや。俺が何の為に自分に声掛けたと思つとるんや？織斑ちゃんにとって自分は心許せる数少ない人間や、それに同じ寮部屋の相手やから変に気を遣うこともないし気心許せる相手が手を貸してくれたら織斑ちゃん

の精神面もホツとするやろ。それとこれはモツピーの為にもなると思うてな。お互いを磨き合い切磋琢磨する事で心身共に成長するのも人間や。織斑ちゃんのトレーニングを通じて自分の変わるきっかけ作りになれたらなとまあ考えた訳や」

「アラン…」

箒はアランの意図を知り、一夏だけではなく自分の事もキチンと考えていた事に内心驚いていた。最初はあまりにも軽薄かつ人を煽る失礼な男かと捉えていたがアランへの見方を改めるべきだと考えていた。

「それにこのまま発展したら織斑ちゃんとモツピーが夜の創生合体してG oする様を見届けるのも楽しみみやからなあ!!」

「何を考えてるんだお前はああああ!!」

「ぶううええ!!」

箒は竹刀を手にしてアラン目掛けてフルスイングするとアランはさっきまでの様子とは打って変わって吹き飛ばされるだった…

事の経緯を聞いた箒から聞いた俺は改めてアランの強さに驚くと同時にアランが何者かを知りたい好奇心が湧く。しかしアランは肝心な事はぐらかして自分の事を語ろうとしないな…俺がそう考えていると天井に頭をぶつけたアランが何事も無く起き上がる。

「さてさて後は門下生1号モツピーに任せて、俺は男でも動かせるISの完成に近づく為に整備室でシコシコやつとくから頑張りと織斑ちゃん。それと先走ったパトスが抑えられんようになって創生合体するのはええが避n：「さつさと行け！この変態が!!」  
ぼふお!!」

アランが言い終える前に箒が竹刀を槍投げの要領で投擲してアランの額にぶつけるのだった。俺と箒が創生合体ってどういう意味だ？今度千冬姉に聞いてみるか。俺はこうして新たに協力してくれる助っ人、箒の助力もあり順調に前へ進んでいる事を自覚していたがその裏でオルコットに迫る悪意にはその時はまだ誰も気付いていなかった  
……

一夏が箒と共に道場でアランが組んだトレーニングを実践している一方、IS学園内にある第3アリーナでは誰もいなくなった中、セシリアが自身の専用機である「ブルー・ティアーズ」に搭乗して射撃訓練に励んでいた。アリーナの使用時間ギリギリまでの時間しか申請が取れず、ほんの1時間弱しか練習出来ない状況下であってもセシリアは精神を乱す事無く空中に浮かぶ立体ディスプレイに映る的に目掛けて自身の主武装でもあるレーザーライフルを用いて的の真ん中へと狙いを定めて見事に命中させるのであった。セシリアはディスプレイに映る時間を見るとアリーナの使用時間があと僅か

になっている事に気付いて急いで機体の展開解除してデイスプレイの機材を元の場所に直し終えて更衣室へ着替えに行こうとしたその時、上級生と思わしき生徒がセシリアが来るのを待っていた。

「練習お疲れ様。流石はイギリスの代表候補生にして1年生の中でもエリートと呼ばれるセシリア・オルコットさん、貴女をずっと待っていたわ」

「何方かは存じませんがわたくしに何の御用でしょうか？今から更衣室に戻って着替えたいのですが」

セシリアは話し掛けてきた相手が上級生とは言え見ず知らずの人間にいきなり話しかけられ警戒心を示すがそんな上級生はセシリアの様子を気にする事無く話を進める。「そんなに警戒しないで頂戴、私は貴女のサポートに来たの。来週の月曜日に神聖なるIS学園にどんな手を使って入ったか分からない害虫と勝負すると聞いてね、居ても立っても居られなくなって直接話そうと思ってね」

その上級生は一夏の事を花園に紛れ込んだ害虫のような扱いで喋り出すとセシリアにある提案を告げる。

「いかに千冬様と同じ血の通った弟とは言え、所詮は下賤な生き物。この学園には不要な存在なのは貴女も理解してるはずよね。ならいっその事、来週の試合で私がああ害虫を試合に出れなくしてあげるから私と手を組まない？そしたら貴女はもつともつと輝

けるわ。それこそ千冬様、いいえあんな野蛮な雌ライオンさえも越えた存在に……」

上級生は千冬を野蛮人扱いした上でセシリアへ手を差し伸べて掴もうとしたが……

パシンっ!!

その手はセシリアの手によって振り払われるのであった。

「お断りしますわ。相手が誰であれ、わたくしセシリア・オルコットは正々堂々と全力で立ち向かいますわ!それに学園内の生徒が憧れる織斑先生を侮辱するような下賤な方と手を組むなんてこちらから願ひ下げです。早くそこを退きなさい無礼者!!」

「そう……残念だわ。貴女なら崇高なる同志になれると思っていたのに、その威勢必ず後悔させてあげる……」

セシリアの堂々とした一喝によって上級生は負け惜しみを言い残してこの場から去って行くとセシリアは更衣室へと急ぎアリーナから退出するのだった。

そして、セシリアの一喝によってこの場を去った上級生は人気の無い場所でスマホを何処かに電話を掛けていた。

「申し訳ありません、セシリア・オルコットを我が組織への勧誘に失敗致しました」

『別に構わんとも、時代遅れの貴族社会の中でしか輝けん小娘だ。勧誘出来たとしてもオルコット家が残した莫大な遺産のみでアレ自体に用は無い。お前は引き続き学園内に潜入し、IS学園の内部崩壊を狙い我々が暗躍しやすいように行動を移せ』

「畏まりました。全ては偉大なるマザーの御意志の下に……」

『ああ。マザーの御意志の下に、吉報を期待しておく』

上級生は相手の声に頷くとスマホを切り、胸元に仕舞っていたエンブレムを取り出すと天を仰ぐように祈りを捧げ出す。林檎を手に掲げた聖女のレリーフが彫られていたエンブレムを取り出した上級生の表情は恍惚な表情で猟奇的な笑みを浮かべるのだった。

そして5日の期間があつという間に過ぎ去り、クラス代表決定戦当日

放課後第3アリーナAピット内にて……ISスーツを身に纏った俺は今、焦っていた。何故なら代表決定戦前までに届く予定だった俺の専用機が何らかの影響を受けて当初の予定からかなり遅れていたからだ。しかもその専用機はまだ届いていない。これには流石の俺も地団駄を踏む勢이었다が……

「落ち着けや織斑ちゃん、焦る気持ちは俺も分かる。そんな時やからこそどっしり構えて常に余裕ある表情を浮かべるんや」

アランの言葉に俺は落ち着きを取り戻そうとしていた。トレーニング中、俺は訓練機のISを動かそうと訓練機の使用許可証を申請しに行つたが何故かタイミング悪く俺が訓練機を使う機会は一度も無かった。その穴埋めとしてアランが用意したトレーニングメニューやイメージトレーニングを重ねて来たが果たしてそれが代表候補生のオ



ルコットにどこまで通用するか…と考えていたその時

「織斑君、織斑君！い、今織斑君の専用機が搬入されましたあゝ」

副担任の山田先生が駆け足で俺の下まで来て知らせに来てくれた。

「マーヤ先生、態々来て下さってホンマありがとうございます。さあこのタオルを使って汗を拭って下さい。それに息も乱れたままやと身体に負荷が掛かりますから俺が言う呼吸法で身体を落ち着かせて下さい。ヒツヒツフー、ヒツヒツフーと声に出して息を吸って吐いて下さい」

「ヒツヒツフー、ヒツヒツフー！」

「教師にラマーズ法をさせるな大馬鹿者」

「ぶっぶううっ!？」

ラマーズ法で息を整えるよう促していたアランは千冬姉の右フックを喰らい、回転しながら吹き飛ぶ。と言うか俺の身内の人間は腕力が人間越えしていないか？

「おい馬鹿弟、今失礼な事を考えなかったか？」

「イイエ、ナニモ…」

危うく俺にまで飛び火が飛びそうになったが何とか助かった。

「それはそうと早よ織斑ちゃん専用機をフォーマットとフィッティングするのが先決や！マーヤ先生、専用機の搬入口まで案内頼みます」

「分かりました。直ぐに専用機のシエルターを解除します」

「織斑、お前は直ぐに搭乗出来る様に準備しておけ」

「えっ、あ、はい」

さつきまでの落ち着いた空気とは違ってアラン達は急ピッチで動き出ししていた。俺は千冬姉に言われるがままピットから出てISが格納されている搬入口まで来ると白一色に染まった機械鎧が鎮座していた。

「これが織斑君の専用機【白式】です！」

白式：…これが俺の専用機：俺はふと鎮座された白式にふと触ると入学試験の時に起きた膨大な知識の波は来なかつたが、何の為にこのISがあるのかは理解出来た。コイツは、白式は俺を待ち続けていた。俺の思い上がりかもしれないが触れた瞬間、そんな感じがしたんだ：そして俺は促されるまま鎮座された白式に座り身を委ねるように身体を楽にして座るとアランがキーパッドを手にしてプログラムを打ち込んでいた。

「その場凌ぎになつてもうたがフォーマットとフィッティングが完了する時間を短縮するプログラムを白式に打ち込んだ。織斑ちゃん、お前はこの短い間俺のハードメニューカリキュラムを乗り越えた男や。胸張ってええで！後は全力で楽しめ！」

「最初はどうかと思つたけどありがとうなアラン」

アランはプログラムを打ち終えるとそのままサムズアップして俺に見送るが親指を

人差し指と中指の間に入れて上下に動かしていると千冬姉からドロップキックを喰らっていた。多分俺の緊張を解すつもりでいたと捉えておこう。

「白式のハイパーセンサーも馴染んで来ているようだな。一夏、問題無いか?」

「ああ問題ないよ千冬姉、あつ」

「別に今は構わん。それなら良い、私から言えるのは一つだけだ。頑張れよ」

普段は俺を名字で呼ぶ千冬姉だが俺も釣られてつい、名前で呼んだが千冬姉は気にして無い様子で穏やかな口調で答えると俺に激励を送るのだった。

「一夏、気を付けてな」

「ああ、ありがとな箒。俺の為に遅くまで付き合ってくれて…やるからには勝つつもりで行くから見届けてくれ」

「当たり前だ。私はお前の…いや、なんでもない。行つて来い!」

俺はピットゲートまで進み、白式を授業で教わった通りに自動浮遊歩行システムで浮かせるとゲートが開きアリーナへと進むとそこには対戦相手であるオルコットが青いISを纏ってライフルを携えて待ち構えていた。

「あら、随分時間が掛かっていたようですね。あまりにも遅いからわたくしは逃げ出したのかと思いましたわ」

「アランが逃げも隠れもしないと言ったんだ。俺だけ逃げ出すわけにはいかないだろ

「？」

「へえー、少しだけ貴方の事を見直しましたわ。そんな貴方にわたくしから最後のチャンス差し上げますわ」

「チャンス？」

俺はオルコットが言うチャンスの言葉にロクな内容じゃない事は理解していても一応聞いておくことにした。

「このまま戦つても貴方が赤っ恥を搔くだけなのは目に見えておりますから早めにギブアップされる事をオススメしますわ。そうしたら貴方の事は不問に致します。ですがあの道化師はわたくし自らが鉄槌を下しますけどね」

オルコットは余裕な表情を浮かべて喋りつつもライフルに掛けられた安全装置を解除しており、何時でも撃てる準備を整えていたが…

「悪いけどそれはチャンスとは言わないな。それに友達を売って自分だけ助かろうとするなんて男以前に人として終わってるだろ？お前への返答はNOだ！」

俺はオルコットにハッキリと自分の意思を伝えるとオルコットは一瞬、驚いた表情を浮かべていたが直様元の表情へと戻る。

「そう…ではここで、お別れですわ！」

オルコットは眼に見えない速さで俺の胴体目掛けてライフルの引鉄を引いてレー

ザーの一撃を放つが…俺はライフルの直撃をギリギリの距離で回避するのだった。

「少しはやるようですね…そうでなくては面白味が有りませんもの」

「伊達に備えてきたわけじゃ無いからな」

「では始めましょうか、このセシリア・オルコットとブルー・ティアーズが奏でる華麗な  
円舞曲ワルツを！」

「悪いな、俺は円舞曲よりJ—POP派なんだよ！」

こうして俺とオルコットによる代表決定戦が幕を開けるだが…

「フフフ、見てなさいセシリア・オルコット、この私の誘いを断った愚かさ思い知らせて  
あげるわ…」

その裏で身勝手な悪意が俺達に伸びようとしていた……

## 第4話【零落白夜】前篇

一夏とセシリアが第3アリーナで試合を行っている最中、隣の第4アリーナ内の格納ピットにてある2人の人物が話をしていた。

「これがマザーよりお前の為に託されたI.S.だ。第二世代機とはいえ軍用にチューンナップされた上にコアにかけられたリミッターも解除してある、いかに相手が第3世代といえども所詮は試験機。お前に負ける要素は微塵も無いが……」

「御安心くださいセイレーン様、このクリスティーナ・ガルニシラ必ずやマザーのご期待に応えて見せます。私がセシリア・オルコットと織斑一夏の2人を始末した暁には……」  
「ああ、お前を我が組織の幹部候補として迎える事をマザーに口添えしよう。だが、しくじったらどうなるかは理解しているな？」

ピット内で話す2人の内1人は、セシリアを自分が属する組織に勧誘しようとしていた上級生ことクリスティーナ・ガルニシラである。クリスティーナは女尊男卑主義者であり前々から一夏やアランの事を毛嫌いしていたが表面上には出さずにいた。そしてもう1人の人物は顔を見られたく無いのか全身をフード付きコートで身を覆い隠し、顔には蛇を彷彿させるマスカレードマスクを被り素顔を隠す徹底ぶりの人物ことセイ

レーンはクリステイナーナに圧みを含んだ言葉で言い放つ。

「はい！必ずや遂行致します!!」

クリステイナーナはセイレーンから発せられた殺気に身震いしたがすぐさま気を持ち直して血相を変えた様子で答える。その様子にセイレーンは一言『私の期待に応えて見せるよ』と耳元で呟きピット内を後にすると蛇に睨まれた蛙のようにビクビクしていたクリステイナーナはその場に崩れ落ちる。

「ハア、ハア…今に見てなさいセイレーン。アンタの椅子は私が奪ってやるわ。それまで精々胡座を掻きなさい」

クリステイナーナは誰もいなくなったピット内で本音を露わにすると組織から与えられた第二世代機〔ラファール・リヴァイヴ A アーミースタイル S〕に搭乗し隣の第3アリーナ内でクラ

ス代表決定戦を行っている標的の元へ向かうのだった…



試合開始から10分が経った中、オルコットの狙撃を回避しながら俺は反撃の機会を狙い、白式の拡張領域内にある近接ブレード〔雪片式〕を取り出して間合いを詰めるが俺の狙いを把握していたオルコットは俺が距離を詰めると同時に距離を取る。

「近接戦のみの武装でわたくしに挑もうだなんて無謀にも程がありますわ。それに…貴方はじめてその機体を扱うのでしょうか？貴方の動き、機体に振り回されて活かしきれ

ないのには目に見えますわ」

「それがなんだってんだ。それだけで俺にもう勝ったつもりでいるのか？勝負は最後までやってみないとわからないだろ？」

「その往生際の悪さがいつまで続くかしら？遊びは終わりにしましょう！わたくしセシリア・オルコットが操るブルー・ティアーズの真髄をお見せ致しますわ!!」

オルコットがそう言い放つと背中に浮いていたフィン状のボード4枚が意思を持ったように動き始めてライフルと同じ青いレーザーを放つ。

「ぐっ!？」

【白式シールドエネルギー残量495/600】

レーザーの軌道を読めなかった俺は4発をまともに受けてしまい、絶対防御が作動してエネルギーが減ったのを空中ディスプレイに映るエネルギー残量を確認した。それにしてもなんだ今の攻撃は……さっきまでの直線の射撃じゃなく俺の死角を的確に狙って来た攻撃だった。俺がさっきの攻撃に困惑している内にオルコットが勝利を確信した笑みを浮かべてハイパーセンサーのオープン・チャンネルで回線を繋げる。

「フフフ、これで分かったでしょう？貴方の勝ち目は微塵も無いことが、ISを碌に動かしたこのない貴方に敬意を込めて全力で潰して差し上げますわ」

「そりゃどーも、俺相手に本気になってくれたって事は俺がもう油断出来ない相手だと



判断したんだろ？」

俺の言葉にオルコットは一瞬眉を顰めたがすぐさま余裕の笑みを浮かべて背後のビットに指令を出す。俺の死角を狙った攻撃だが…一度喰らった技をそう何度も喰らうか！俺はビットから放たれるレーザーを見切つてギリギリの距離で交わすとオルコットは驚きの表情を浮かべていた。

「なっ！わたくしのビットを見切つたと言うのですか！いいえ、マグレに決まっていますわ」

オルコットはビットに視線を配ると4枚の機械羽は主人の命令に忠実に従う猟犬のように俊敏に動き俺の死角を狙うが、俺はレーザーが当たるギリギリの距離で避けたり、レーザーを近接ブレードで叩き切つて攻撃を防いだ。すると今度はライフルによる狙撃が襲い掛かる…が雪片をバットのように持ち手を構えてレーザーを跳ね返した。

跳ね返したレーザーはライフルの銃口に命中しライフルは爆散した。オルコットは予想外の事態に驚くもライフルが爆発した瞬間、怯んで隙が出来た。俺はその隙を逃さず一気に距離を詰めて無防備になったオルコットの中腹部に胴切りを打ち込む。

〔ブルー・ティアーズ シールドエネルギー残量 500/600〕

ハイパーセンサーに映るディスプレイからオルコットのシールド残量の情報が開示される。ようやく一撃が決まったと俺は余韻に浸り、掌をグッと握つたその直後4枚の

ビットから放たれるレーザーをまともに命中した。

「があっ!？」

【白式 シールドエネルギー残量 307/600】

「戦闘中に油断なんていい御身分ですわね。わたくしのブルー・ティアーズに傷を付けただけでなく、あんな野蛮なやり方でライフルを壊すなんて無茶苦茶ですわ!」

「これは俺に訓練を施した有り難い教官達から教わったものだよ。それにその言葉そのままそっくり返してやるぜ!」

俺はオルコットの周囲に浮遊していたビットを全て破壊しようとしたが、俺の行動を察知したのかビットを拡散させるが4枚あるビットの内、2枚を斬り落としたが残り2枚のビットから放たれたレーザーを喰らいシールドエネルギーを消耗する。

【白式 シールドエネルギー残量 178/600】

【ブルー・ティアーズ シールドエネルギー残量 458/600】

ハイパーセンサーから表示されるシールドエネルギーはオルコットが有利に見えるが主武装のライフルは大破、虎の子のビットも残り2枚で武装面はやや心もたない状況だ。対して俺はシールドエネルギーが半分以下を切っているが主武装である近接ブレードはまだ残っている。この試合、まだ行ける!俺はまだオルコットに勝てる要素が残っている!俺は距離を取ろうとするオルコットに追撃を行うのだった。

## ◆ 第3アリーナ Aピット内

空中ディスプレイに映る戦闘試合をアランと箒は観戦していると小刻みに脚を震わしていた箒が我慢出来なくなったのか荒げた声で苦戦を強いられている一夏に檄を飛ばしていた。

「何をしている一夏！ええい、私が教えた動きを活かせていないではないか！」

「まあ、落ち着きいやモツピー。織斑ちゃんの状態は追い込まれてるように見えとるがオルコットの虎の子でもあるビット兵器は半分しかない上に主武装のライフルは木っ端微塵になつとる。あとは織斑ちゃんの腕次第や」

「何を悠長にしているんだアラン…つて誰がモツピーだ！私は箒ノ之箒だとあれほど…」

隣で織斑ちゃんの幼馴染である箒ノ之箒ことモツピーが目の前光景に熱狂して試合を観ていた。初見の凜とした様子をかなくり捨てて素の様子で喋っていると俺のスマホに着信が入り、画面に映るを画像を観て俺は黒い笑みを浮かべるとモツピーは俺の形相に動きが止まる。

「すまんなあ、モツピー。ちょいと野暮用が出来たから試合の様子を見届けといてや」

「なっ!?こんな時に野暮用とはどういう…」

モツピーは言葉を続けようとしたが、蛇に睨まれた蛙のように身体を硬直させていた。何故なら…

「ああ…ちよいとお片付けせなあかん事が起きたからなあ」

掌のスマホを握り潰してだだ漏れな殺気を抑え込んでる俺の姿に驚愕と威圧された表情を浮かべていたからや。と、いかんいかん愛と平和とエロスのパイオニアにして漢の中の漢である俺のイメージが台無しになってまう。俺はここで場の空気を和らげるアホの仮面を被り直す。

「それ終わったら織斑ちゃんのお祝い会やろうや！そんなもってモツピーの処女開通式と洒落込もうやないか」

「さっさと行ってこい！この変態が!!」

「ごっつふう!?!」

モツピーの右ストレートをわざと喰らって俺はピット内を後にする。

そしてこの試合に水を刺そうとするアホンダラにはドギついお仕置きをしたらんな…

後篇へ続く…